

IBM Cloudに
まつわる

あの噂は
本当なの？

7つの 都市伝説

「仮想環境をそのままクラウドに移行するメリットは分かるが、自社に合ったサービスの選び方が分からない」という声をよく聞く。そこで今回は「IBM Cloud」を取り上げ、このサービスについて噂されている「7つの都市伝説」をひとつひとつ、スペックシートでは見えてこない真実を明らかにする。

都市伝説 / 1

いろいろなメガクラウドが「VMware on XXXX」を
始めているが、最初に始めたのはIBM？

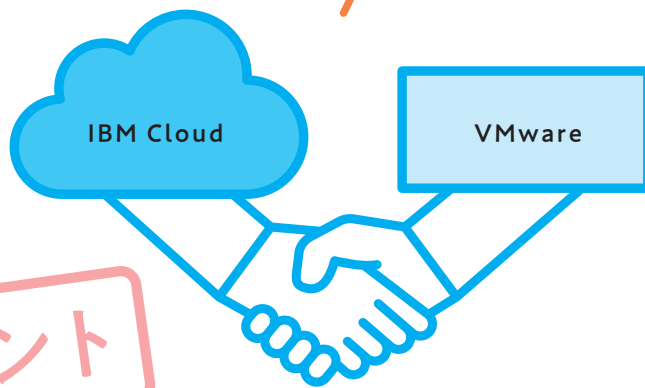
これは「本当」です。2016年2月にIBMとVMwareがグローバルな提携を発表し、「VMware on IBM Cloud」がスタートしました。その後もVMware Solutions SDDC環境の構築やHCXの実装など最新技術を積極的に取り入れてきました。現在ではvSphereだけでなくNSX、vSAN、vRealize OperationsといったサービスをSDDCでクラウドのサブスクリプションとして購入できます。「VMware on IBM Cloud」ではクラウドのサーバに単純にvSphere等を搭載するのではなく、自動化ソリューションも含めて戦略的に提携しており、こうした取り組みはIBMが初めて実施したものです。

メガクラウドで初！2016年

IBM Cloud

VMware

○ホント



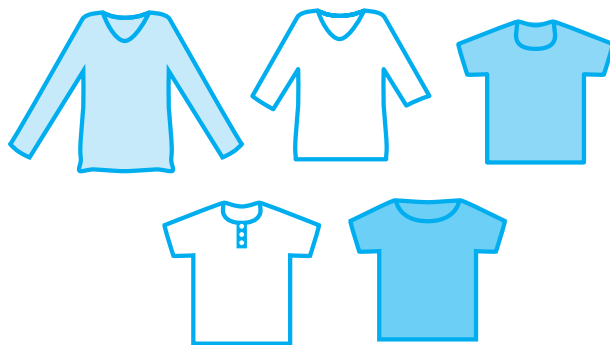
都市伝説 / 2

VMware ESXiホストのスペックを
とても柔軟に選べるってホント？

これは「本当」です。もともとIBMクラウドでは物理サーバのサービスを提供してきた歴史があります。そのためvSphereを導入可能な物理サーバの種類は豊富にそろっており、S、M、LといったTシャツのようなサイズのような刻みではなく、もっと細かな刻みで、ニーズに合わせた柔軟なリソース提供が可能です。サーバ選択ではさまざまなCPU、メモリ、ストレージオプションなどの条件によって柔軟に選ぶことができ、CPUの世代も常に最新のものを用意しています。また調達も1台につき数時間でプロビジョニングが可能です。



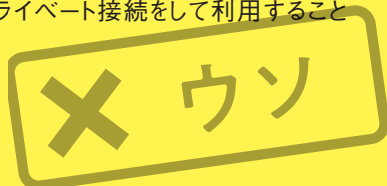
ニーズに応じた品ぞろえ！



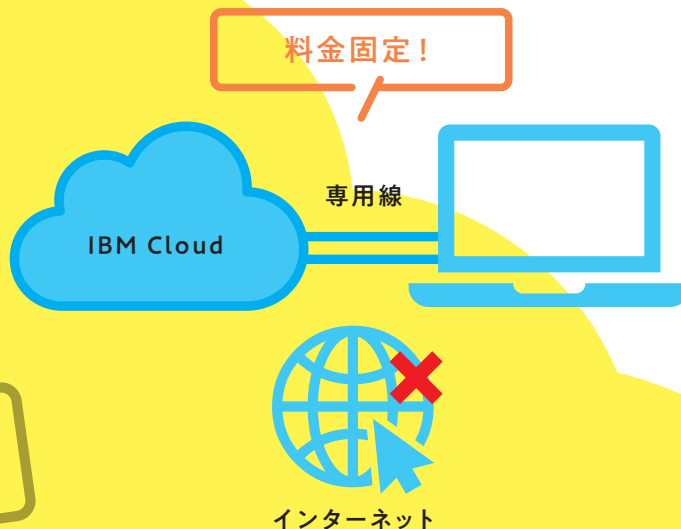
都市伝説 / 3

クラウドなので基本的には
インターネット（含VPN）経由での接続になるの？

これは「誤り」です。専用線接続を選択すると一度もインターネットに出ることなく利用できます。しかも上りも下りもデータ量による従量課金ではなく固定料金となっています。この専用線接続は現在も多くの企業ユーザーに利用されています。IBM Cloudのデータセンターでは、ネットワークのゾーンをケーブルレベルで切り分けています。つまりクラウド内のケーブルレベルでトラフィックを分けているということになります。ユーザーのサイトから専用線を使ってIBM Cloudのネットワークゾーンにプライベート接続をして利用することになります。



料金固定！

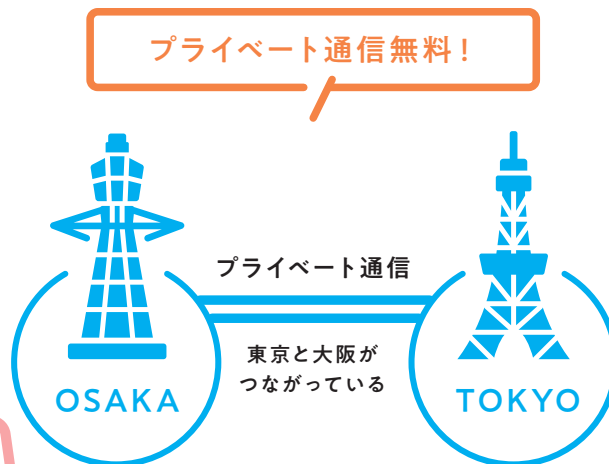


都市伝説 / 4

ゾーン間、リージョン間のデータ転送に追加費用が発生しないってホント？

これは「本当」です。世界に60以上あるIBM Cloudのデータセンター間は高速・広帯域のプライベート回線で接続されており、無料で利用できます。海外のデータセンターにバックアップやデータ転送するときでも、プライベートのネットワークに関する費用が発生しません。東京リージョンではマルチゾーンリージョンという形で3つのアベイラビリティゾーンで構成されています。この3つのゾーン間では高い可用性を維持していつでもデータの振り替えなどが実施できるようにしています。また東京以外にも大阪リージョンが2020年9月に稼動し、両リージョン間のプライベート通信も無料となっています。そこで2つのリージョンを活用してDRサイトを構築するユーザーも増加しています。

ホント

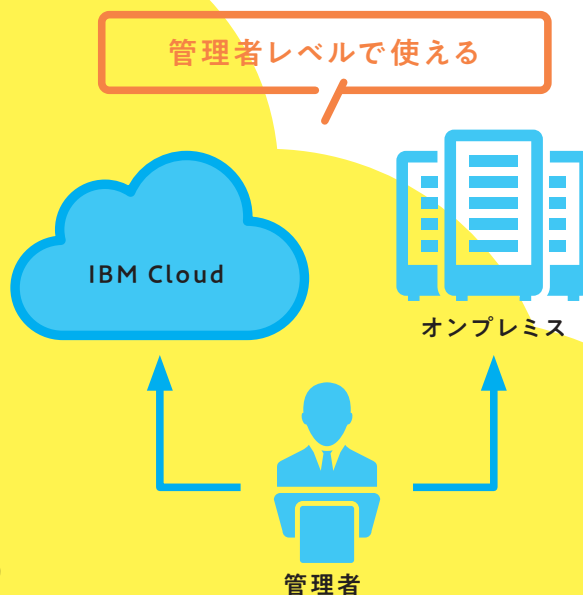


都市伝説 / 5

IBM Cloudのユーザーは、
専有環境でもクラウドベンダーが払いだした
一定の権限をもつユーザーを使って運用・管理を行うの？

これは「誤り」です。専有環境であるvCenter Server (VCS) ではvCenterのAdministrator権限など「オンプレミスと同じ」管理者レベルで利用できます。この伝説の意味は、権限が場合によっては奪われてしまい、自由に操作できなくなるのではないかと、ということですが、それは違います。シングルテナントのVCSのサービスでは、Admin権限があります。IBM Cloudではそうした権限の制限がないので、オンプレミスと同じように運用していくことができるのが強みとなっています。Admin権限があるとvSphere HAやDRS、vMotionを使って今までどおり環境を制御できます。ただしSDDCの層をクラウド事業者で管理するサービス形態となっている場合は、ユーザーの権限が限られる場合がありますので注意してください。

×ホント

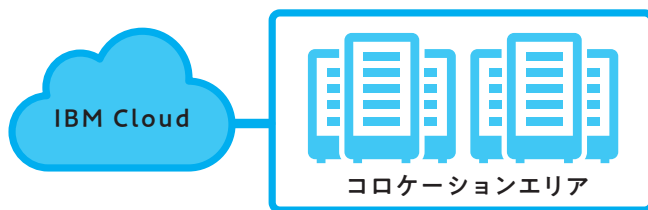


都市伝説 / 6

IBM Cloudはクラウドなのに
コロケーションもできるってホント？

これは「本当」です。既存システムとのハイブリッド構成を重要と考えるIBMならではのアプローチです。システムには、クラウドには移行できない専用ストレージやデータベースなどの専用アプライアンス製品などを利用している場合があります。そうしたハードウェアの機能を別のものに置き換えられないこともよくあります。そういう場合は、コロケーションエリアとIBM Cloudとを構内接続して利用することが可能です。コロケーションエリアをクラウドに近い場所で接続することで、従来どおりの運用を継続できます。

近くの場所で接続

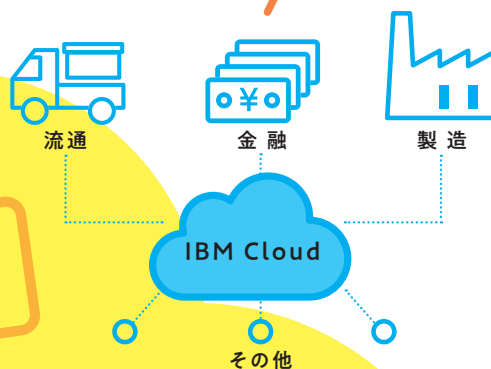


都市伝説 / 7

VMware on IBM Cloudは金融、製造、流通など
業種を問わず本番環境での採用実績も次々と出ているの？

これは「本当」です。すでに世界で2,000社以上の採用実績があり、日本でも数100VMクラスの大規模な導入事例があります。例えば富士フィルムではオンプレミス環境の8割をIBM Cloudに移行し運用コストを2年間で45%削減すると効果が出ています。また福井銀行では、数百台の分散系システムをIBM Cloudへ移行して最新テクノロジーを今後も長期的に利用できるように環境を構築。福邦銀行との包括連携の取り組みの一つとして、福邦銀行が自行内のサーバーで運用している分散系システムをVMware on IBM Cloud環境に移行し、福井銀行のシステム運用体制と連携させます。さらに、山田製作所ではPLMで使用するデータベースのライセンス遵守のため「VMware on IBM Cloud」を選択。IBM Cloudのデータセンター間の10Gbpsの高速専用線は通信費無料のため、ファイルの転送速度は28～80%向上、パケットロス率は30%から1%に劇的に改善されました。しかも、同プロジェクトのシステム構築は1週間で、通信コストは4分の1へ削減されています。

さまざまな業種で実践



ここまで述べてきたように、「VMware on IBM Cloud」が評価されるポイントは、「柔軟なリソースの選択肢がある」「リージョン間の通信が無料」「管理者権限が利用者側も持てる」「オフラインの幅広い選択肢が提供されている」といったことです。VMwareベースのワークロードの移行やモダン化に、IBM Cloudの力をお役立てください。